

中国人ホストにおける日本人留学生との異文化接触 － AUC-GS学習モデルに基づく異文化への認知と対応の整理－

Chinese Hosts' Intercultural Contact with Japanese International Students :
Categorization of Recognition and Coping Based on the AUC-GS Learning Model

岡山大学社会文化科学研究科 奥西有理

田中共子

Yuri OKUNISHI

Tomoko TANAKA

要約

日本人留学生と交流経験を持つ、中国人ホスト学生15名及び中国人ホストファミリー6名を対象として、異文化接触における認知と対応について半構造化面接を実施し、AUC-GS学習モデル(田中・中島, 2006)に基づき分析を行った。異文化に対する「気づき(A段階)」「理解(U段階)」「対処(C段階)」の3段階につき、語りからこれらの有無を判断してカテゴリ分けを行った。異文化への気づきはあるが葛藤への理解はなく葛藤場面にも出会ったことがない、というカテゴリに最も多くのホストが分類された。従来から異文化交流の正統派であると考えられてきた、異文化への気づきと葛藤理解と葛藤対処の3段階全てが備わったカテゴリにも、4名の学生が認定された。しかし、異文化葛藤への対処の仕方は、日本人学生のそれとは異なる傾向が認められた。中国人ホストは、日本人学生が実践していたような他者視点に立った調整型の対処方法というよりは(奥西・田中, 2009)、自己の視点を機軸とした寛容さの発露により解決を試みていた。

序

教育の国際化が進み、海外での学びを目的とした人的流動性が高まる中、日本国内にも多くの留学生が来日するようになった。留学生30万人計画の下、政策的に在日留学生の数の増加が推進された。その結果、平成20年5月1日付けで外国人留学生数は123,829人に達し、過去最高となっている(日本学生支援機構, 2008)。これ以外にも、実際は、観光ビザ等で入国し、日本の大学や高等学校、あるいは地域社会において広く体験的な学びを目的とした短期滞在者も、一般には広く「留学生」として認知されている。大学や地域社会において、受け入れホスト社会の構成員である日本人が、海外に出向くことなく外国人と身近に接する機会は増加している。留学生は、勉学を直接的な滞日目的としながらも、異文化体験による広い意味での学びもしばしばその意図に加えられる一時滞在者である。彼らとの接触は、日本人ホストの側からすれば「国際交流」の機会であり、積極的な意味が付与されて、歓迎すべきものとして位置づけられることが多い。たとえば、交流を通してホスト社会構成員の異文化理解や対応が向上していくといった、ホストの側への肯定的影響が生じるものという期待がみられる

(文部科学省, 2008)。

こうした期待は、実証されているのだろうか。実際にはそれほど単純な話ではない、との示唆もある。奥西・田中(2008)は、留学生と接触する日本人学生は少なからず、留学生との異文化葛藤に遭遇していると報告している。そして留学生の増加した大学内は、多文化環境が提供されているとの認識の下に、奥西・田中(2009)は、日本人ホスト学生がどのように留学生と交流し、どのように異文化葛藤を認知し対応しているかの詳細を調べている。すると葛藤にどう向き合い対処するかは、実に多様であることが分かった。従来欧米研究者からは、異文化葛藤の対処方法として、葛藤の存在に気づいてそれに向き合い乗り越えるという対処方法が、異文化交流の正統なあり方として指摘されてきた(Hall, 1976)。しかし実際の異文化交流において、留学生との間の異文化葛藤に正面から向き合い対処を試みる者は、比較的少数であった。しかも彼らのとった対処方法は、特定の文化に配慮した方法というよりは、文化一般的な方法が主になっていた。葛藤を直視して調整したり乗り越えようとしたりすることはまれで、葛藤に向き合うことを回避してその場の関係を維持しようとする対応があったり、そもそも異文化間に葛藤が生じるという認識自体が希薄といった、欧米研究からは想定されていない対応、いわば日本の社会文化的環境下で特有と思われる対応をするケースが見いだされた。

こうしたことから、留学生との国際交流は、日本人ホストにとって、必ずしも異文化理解を高める機会とはなっていない可能性が考えられよう。彼らは必ずしもゲストの異文化性に向き合っておらず、心理的次元で存在するであろう異文化性を十分認識していなかったり、あえてそこから注意をそらしたりしてつきあったりすることが頻繁である。日本的な認知的枠組みの範囲で、異文化性を認識し対処を行っているとはいえ、必ずしも同じ認知的枠組みを持たない留学生の側から見て、的確な対処を行ったとはいえないという場合も考えられる。そういった意味で、留学生との接触を通して異文化への調整の仕方を学んでいる、とは言い切れない。

彼らの葛藤の認知や対応の仕方をみていくと、日本人ホストの対応の背後に、日本文化が反映されている可能性に思い至る。つまり日本的な価値観に沿って、日本人が好む葛藤回避的な対処方略が使われていたり、特定の海外文化に対するあこがれが具現化されていたり、外国人との交流を非日常の高級な社交の機会と捉える見方などが反映されて、ホストの対応を形作っているとみることができるのではないかと。いわゆる国際的な関係を築くことが目標視されてきた日本の留学生交流だが、実際は「日本的」スタイルに依った、日本人が彼らなりに解釈した「国際的」な対人関係の構築が進められているのかもしれない。

留学生交流におけるホストの対応と、それをういたゲストとの関係性が、日本人ホストの国際交流スタイルと「国際的」対人関係観を反映しているものであるなら、その特徴は留学生交流に限らず、広く異文化圏の人との関係性の持ち方にも影響が及ぶ可能性がある。日本人が日本で日常的に外国人とつきあっていく結果として、どのような社会が築かれていくのか、すなわち日本型多文化共生がどのようなものになるのかについても、示唆的な情報といえるかもしれない。

まずは、ホストがどう対応した場合に、ゲストとどういう関係性が築かれるのか。日本人ホストと留学生の間で、この基本的な問いを解いていきたい。そしてそれが日本における異文化交流独自の現象なのか、文化一般的現象なのかを区分するという、発展的な問いにも解を求めていきたい。この目的を果たすためには、日本国内の異文化交流を調べるだけではなくて、他の文化圏での国際交流についても調査を行って、日本の社会文化的文脈と結論を対比させながら、それぞれの文化圏での国際交流スタイルと構築された異文化間の対人関係にみられる関係性の解読を試みるのが、有効と考えられよう。

ホスト-ゲスト関係をみていくとき、その文化的な組み合わせはおおむね、多様なホストと一様なゲスト、一様なホストと多様なゲスト、多様なホストと多様なゲスト、一様なホストと一様なゲストのパターンが考えられる。日本人ホストと在日留学生の組み合わせは、比較的一様なホストと多様なゲストとみなせよう。従来の研究の中心は、アメリカ等欧米の多文化社会における、各国留学生とホストとの交流の分析であった。すなわち多様なホストと多様なゲストを組み合わせたものである(Furnham & Bochner, 1982; Furnham & Alibhai, 1985)。だがアジア社会は、同程度に多様なホスト構成になっているとは限らない。日本や中国や韓国には、より多様性の少ないホスト構成がみられる。東アジアで学ぶ留学生に目を向けるなら、社会構成の相違や文化特異性などの観点から、欧米をフィールドにした研究とは異なった形での留学生交流における、異文化接触現象の解明が期待できるだろう。日本型の異文化交流や、少なからずその交流の延長上に展開していくと予想される日本の多文化共生の形は、アジアの留学生交流との対比を通じて、欧米における研究との三角比較の視点を獲得することで、より明確に描き出せるだろう。

本研究は、まださほど多文化化されていないアジアの一社会における交流に注目する観点から、中国人ホストによる留学生交流に焦点を当てた。中国社会のマジョリティ構成員である漢民族の中国人ホストを調査対象とし、彼らが異文化を背景に持つゲストとどのような関係を持つのかを調べて、日本人ホストの場合と対比的に整理していきたい。日本も中国も、移民国家ではなく単一の民族が社会の多数派として存在しているという点で共通性があるが、国内の文化的多様性という観点からは、中国の方が南北の文化的違いなど地域間の文化差が強調される傾向にあるという点で異なっている。つまり、自国内の文化的多様性という観点は、中国人ホストにとって、日本人よりもなじみのある概念だろう。文化的には、東アジアの隣国同士としての類似性と、地理的、歴史的な差異を背景にしたそれぞれの特徴が考えられるだろう。

このように類似しながらも微妙な相違点を持つ両社会において、ホストの外国人留学生との留学生交流が、どのような異文化接触への対応を喚起し、異文化に関わる学びをもたらし、さらにはそうした交流の実践の先にどのような国際化の道が開けていくのかを考えてみたい。ゲストの文化的多様性を組み込むと対応がさらに複雑になると予想されるため、中国人ホストの対応の特徴を焦点化して読み取る意図から、今回は日本という特定の文化を背負った留学生との対応を取り上げる。日本人ホス

トの調査で注目したのと同様の枠組みである、AUC-GS学習モデル（田中・中島，2006）を用いて、まず、認知面において異文化に対する気づきがあるか、更に異文化葛藤への理解があるか、そして異文化葛藤への対応がなされているかどうか、順を追ってみていき、これらの3段階の分岐の仕方でもカテゴリ化を試みる。インフォーマントの語りに基づいた主観的コメントを基にして、どのカテゴリに属するかを弁別していくことにより、中国人ホストの異文化接触における対応の一端が明らかになるであろう。分析の過程で各カテゴリに属するホストの認知や行動について、もし中国文化特異的な面が発見できれば、中国人ホストの異文化接触対応の質的側面の解明につながるだろう。それを足掛かりとして、日本人ホストの異文化接触における対応の質的側面を読み解いていけるだろう。これは日本という社会文化的環境の下で、何が最適な異文化間教育かを考える上で、重要な知見を提供することになるだろう。

具体的なリサーチクエスチョンは、以下の通りである。留学生交流場面について、中国人ホストは、日本人留学生との交流をどのように捉えていたか。特に、どう葛藤を処理し、対人関係を築いていくのか。この問いへの答えを整理することで、いわば中国式の異文化交流のスタイルを浮き上がらせようとした。奥西・田中（2009）の指摘する、日本人ホストの場合にみられた葛藤回避の対応傾向や、話し合いや意思表示などの文化一般的な葛藤解決傾向は、中国人ホストにも見られるだろうか。「中国式」の異文化交流の解明ができれば、これまでに明らかにされてきた日本人ホストの異文化交流のストラテジーが、彼らに特有のものなのか、中国のホストとも共通するものなのかを知る材料が得られる。

以下では、研究1で、中国人ホスト学生を、続く研究2では、中国人ホストファミリーを取り上げる。ホスト学生とホストファミリーを取り上げたのは、学校及び地域社会という、留学生にとって最も身近な2つの社会におけるホストであること、接触により友情の形成や擬似家族的な関係の構築といった、親密な関係性の構築が期待できることによる。中国人ホストの日本人留学生との交流をめぐる認知と対応を明らかにし、日本人ホストの場合との比較検討を試みたい。

方法

対象者の概略

調査対象は、中国北部に位置するS省の国立S大学及び省都のT市において、日本人留学生と交流体験のあるホスト学生15名とホストファミリー6名。彼らを対象として、半構造化面接を行った。

中国人ホスト学生は、日本語学科に所属している学部3、4年生であり、20歳前後の男女である。日本語関係の授業と関連の深い国際交流活動を通して、学部在学中、日本人留学生と定期的に交流していた。一方、ホストファミリーは、日本のH市との姉妹都市交流を通じて日本人学生を1週間程度自宅に宿泊させていた。比較的裕福な家庭が多い。先に彼らの家庭の子女が、H市に1週間程度派遣されてホームステイをしており、帰国してT市に戻った後、自らの家庭がホストファミリーとなって、H

市からの日本人学生を受け入れていた。ホスト学生も、ホストファミリーも、この交流体験以前に外国人との接触はあまりなく、交流体験がある場合でも、外国語教師や短期訪問者などとの断片的な接触を経験した程度であった。

調査期間

2009年3月～4月にS省T市を訪れ、調査を実施した。

手続き

中国人学生については、S大学教員を通じた縁故法により、ホストファミリーについては、T市政職員を通じた縁故法により調査依頼を行った。調査協力者1名につき、一人あたり約30分～1時間程度の半構造化面接を実施した。中国人学生は、日本語における日常会話が十分可能なため、彼らにはほぼ日本語でインタビューし、必要に応じて同席した日中通訳を介した。ホストファミリーに対しては、すべて日中通訳を介してインタビューを行った。

調査と分析の枠組みは、日本人ホストを対象とした奥西・田中（2009）の調査にならった。問いの中心は、「日本人留学生をどんな存在だと捉えているか」「すれ違いや違和感の経験があるか」「すれ違いや違和感の原因は何だと思うか」「(すれ違いや違和感の経験がなければ) どうすればうまく関係性を構築できるのか」であった。語りは了解を得てボイスレコーダーに録音し、後に書き起こし、中国語の部分は、書き起こしデータを基に日本語に翻訳を行った。

書き起こしデータを基に、AUC-GS学習モデル（田中・中島，2006）の枠組みを用いて、文化に対する気づき（A段階）、理解（U段階）、対処（C段階）の3段階に関して分類を行い、交流タイプの整理を試みた。まず、A段階では、異文化の存在について気づきがない場合をタイプⅠ、気づきがある場合で、文化を「洗練された精神文化（カルチャー1）」（Hofstede, 1991）として捉えている場合をタイプⅡ、「習慣、考え方などの日常文化（カルチャー2）」として捉えている場合をタイプⅢと分類した。続くU段階では、異文化同士の接触や文化間の差異が葛藤の原因となりうるということに関して、理解がない場合をサブタイプ1、理解がある場合をサブタイプ2と分類した。更に、C段階では、実際に起こった異文化葛藤に対し、対処ができていくかどうかという視点から分類を行い、対処がなければサブタイプA、ある場合をサブタイプBと認定した。異文化葛藤に現実場面で遭遇していない場合は、対処が想定されないため、サブタイプCとした。分類に際しては、それぞれの段階に該当する語りが、書き起こしデータに見られたかどうかで判断した。例えば、異文化への気づきと葛藤への理解があり、かつ対処もできていると判断されたインフォーマントは、「Ⅲ-2-B」タイプに分類される。

結果

中国人学生及び中国人ホストファミリーが、AUCの各3段階においてどのカテゴリに分類されるかについては、語りの内容から判断した。以下、カテゴリごとに分類を例示する。例示にあたっては、間投詞など冗長な部分は適宜省き、日本語が不完全な場合は、助詞などを補った。省略されたと考えられる内容は括弧内に補った。下線部は、カテゴリの判断にあたって、筆者が特に注目した部分である。なお、カテゴリの全体像は表1に示した。

タイプI-1-C

中国人学生cと、中国人ホストファミリーfが該当した。両者とも、中国と日本の文化の線引きは行わず、日本文化は中国文化の一部であると認識する。日中は文化圏が同じであるという認識があり、相手の行動に違和感を持つことはなかった。実際の交流においては関係は良好に保たれ、葛藤場面に出会うことはなかった。学生cは、自らの経験から欧米文化との接触は困難を引き起こすと語るが、同じ文化圏である日本人との接触に困難はなかったという。ホストファミリーfは、日本人との交流を、特別なことではないと前向きに捉える。日中の文化に違うところはなく、同じ人間として心を大きく持ち、寛容な気持ちがあれば交流は上手くいくと語る。

学生c

「(日本人の礼儀正しさについて) いい習慣だと思います。」「私と留学生は、一緒に旅行したことがありました。その時、私は常識は同じだと思いました。」「私は、日本の礼儀は、中国から勉強したと思いましたので、同じだと思います。」「中国人は礼儀を、だんだん失ってる。」「欧米の文化は、もっと開放(的)。中国と日本の文化は、元々は孔子からの文化。」「東洋の文化は、漢字の文化。でも、西洋の文化は、符号よっての文化だと思います。その点について文化は違います。」「西洋人たちは、考え方はとても直接(的)。」「(東洋の文化間は)(細かい)ニュアンス(の違いが)ある、勿論。大体は同じだと思います。」「カナダ人(と交流した)。私が高校生の時。(付き合いは)とても難しい。理解しにくい。」「外国人は、理解しにくい。しかし、彼らは、中国人ではない。外国からのお客さんとか。(理解できなくても)大丈夫。」

ホストファミリーf

「(日本人留学生は) 中国人と変わらない。違いはなかったです。」「(言葉が通じないことを除いて)他は全部良かったです。」「日本は、日本であっても、中国の伝統文化をよく継承してるみたい。」「寛容の気持ちさえあれば違うところなんてないですよ。」「まず、気持ちの問題。この子を自分の子供のように接していけば、必ず上手くいくでしょう。自分の子供だって欠点がある。その場合は、寛容に許してあげたりするでしょう。」

タイプⅢ-1-B

ホストファミリーeが該当した。自らの経験を通じて、文化差への明確な認識は持っているものの、それが葛藤を引き起こすという認識を明確に否定する。情熱と誠意で差異を埋められる、対人関係を良好に保つことができるという。

ホストファミリーe

「(日本人留学生と中国人との違いがあったか聞かれて) 確かに違いがありました。多分教育の面での違い。口数が少なかった。」「(日本人留学生は) 礼儀が正しかった。」「気持ちさえあれば、どこの人でも問題ないです。日本に限らず。」「老若男女、中国人、外国人を問わず、もし誠心誠意を持ってその人と付き合えば、まずは気持ちをさらけ出す、嘘を言わない、誠意を持てば、誰とでも上手くいく。こざかしいことをしない。そういうことです。」「文化が違うけどどうまく付き合おうとしたら、誠心誠意が一番。自分の本音を言う。嘘をつかない。そうすれば、相手も必ず、自分の気持ちを感じ取ると思います。」「(文化や国籍の違いは) 私にとっては、問題ではない。」「確かに文化の差異は存在することは認めるけど、私にとっては存在しない。」

タイプⅢ-1-C

学生f、学生h、学生k、学生m、学生o、ホストファミリーa、ホストファミリーdの7名が該当した。文化の違いへの気づきはあるが、習慣の違いと捉えることが多く、心理面にまで踏み込んで理解することは希薄である。差異により葛藤が発生するとの認識はなく、実際の交流場面でも葛藤に出会っていない。今回のインフォーマントにおいては、最も該当者の多いカテゴリであった。

学生f

「(日本人との違いとしては) 食事のとき、その習慣とか違うと思います。食事の前、日本人はいただきます、って。私は先に食べてちょっと困った。失礼って感じ。」「(日本人の先生が見せてくれた991同時多発テロの報道番組のビデオについて)切り口が違う。角度も違う。民衆の苦しみに着目して。政治の面は置いておいて、普通の被害者はいかに苦しいか、そういう視点から事件を見てる。ここが違う。」「(日本人留学生とのミスコミュニケーションの原因は) 私の場合は、多分、性格のせい。文化の違いは、短い交流だけでは見えにくいって考えて。」

学生h

「(日本人と中国人は) ちょっと、違いがあります。考え方がちょっと違います。日本人は他方の立場に立って、いつも考えてる習慣があります。交流している時に、気がつきました。」「(国際交流で) 難しいことは、言葉の表現。言葉がお互いに理解できたとしたら難しくない。」

学生k

「日本人の普通の習慣などは、私たちと違います。」「(国際交流について) ただ、違う言葉を使っている人の交流です。国とかその差別は、存在しないべきだと思います。」「(文化の違いは) 感じているけど、普通は、お互いに交流した時、ただ会話の練習だと思いますから、他の文化などの差別の要因は、言わなくていいと思います。」

学生m

「文化の違いは、私は、印象強く心に残るのは、日本人の曖昧さ。以前、私は日本語で話す時は、間違いがあったら指摘してほしいと(日本人留学生に)言ったが、間違いがあっても、指摘してくれた人は少ない。これは、日本人の曖昧な性格と関わると思います。」「中国人も時々曖昧。ほとんどの場合は、日本人と中国人は似ている。ただ程度の差があると思います。」「(日本人留学生との意見の違いや衝突の経験を聞かれて) 特別親しい友達ではないから、衝突起こるようなことは話さない。」「日本人は、外国人だから。交流は、日本人の友達に悪い話をしたら、ちょっと悪いと思います。」

学生o

「(日本人と中国人は) 習慣がちょっと違います。礼儀とか、例えば食生活の習慣とか。」「ノックした後、失礼します、と言う。中国人の習慣ではそういうのはないです。」「日本人は、プレゼントの交換が好きです。(中国人も) 好きですけど、日本人と違います。大きなプレゼントを贈りたいです。日本人は、小さいプレゼントが好き。大きさはあまり気にしません。」「性格は、もともと一人一人違います。もともと存在。でも、一国の人と一国の人は、文化上の違いが顕著だと思います。」「(文化の違いは) 面白いと思います。」「私は、以前、日本人は勿論、アメリカ人、カナダ人、韓国人、タイ人、オランダ人、色々外国人とも交流したことがあります。違う国の人との交流は知識を積み重ねる機会だと思います。(交流の中身を聞かれて) 普通の交流。会話。」

ホストファミリーa

「以前こういう経験がなかったので、文化の違いがあるし、それが何をもたらすのかと思って。」「(文化の違いの中身について聞かれて) 例えば、生活習慣とか、時には多分、飲食も。(日本人留学生は) 住むところにあまり慣れないようでした。」「(日本人との交流でトラブルは) なかったです。」

ホストファミリーd

「(日本人留学生は) 特に大きな違いはなかったです。おそらく、言葉の面だけ。もし、言葉の壁がなければ中国の子供と同じだと思います。」「(文化の違いは) 分かりません。彼女の滞在期間は短く、一人の子供に過ぎず、大人ではありません。」「(文化の違いが交流の障害となるかどうかは) 双方の交

流方式によると思います。人と人との間には違いがありますし、中国人と中国人の間でも、不一致や争い、差異があります。二つの国の間ならなおさらです。もし、長期間一緒にいたら、あるいは、特に一つの事を一緒にやる場合は、そうした違いが出てくるのかもしれませんが。」「友好のための往来、生活レベルでの交流、あるいは思想面での交流なら、大きな問題は起こらないと思います。」「もし、仕事や生活環境ということになれば、例えば、海外と海外、中国人と外国人、中国人と中国人との間も含めて対立が起こりえると思います。」

タイプⅢ-2-A

文化差への気づきがあり、それにより生じうる葛藤についての認識もあるが、対処ができていない。学生b、学生g、学生l、ホストファミリーbの4名が該当した。

学生b

「(日本人留学生は) 話し方とか、物事についての見方とか (違いました)。」「(すれ違いの経験について聞かれて) ありました。」「中国人と深く付き合いたくないと、思っ。あの、時々冷たいと思っ。日本人は、外という意識が強いですから。中国人と日本人は、そんなに深い関係、出来ないと思っ。」「冷たい！深い話題が出来なくて。だから、冷たい。心からの交流が出来なかった。」「冷たいイメージは初めてのイメージでした。自分の考えは、全部の日本人のイメージは、ちょっと冷たい。」「日本人より、アメリカ人とかカナダ人とかもって、情熱 (的)。「(交流がうまくいかないのは) 日本人の民族意識が原因で。中国人は、政治の原因で。今、日本人に偏見を持っている中国人はたくさんあります。」

学生g

「日本人は礼儀正しい。(中国人は) 初めての時は、“ありがとう”とか使いますが、その後だんだん知り合いになったら、あんな言葉はあまり使いません。」「日本人は、ご馳走される時、食べ物全部食べる習慣がありますか？日本人は、食べ物一人分の量が少ない、そうでしょう？でも、中国人が食べる時、テーブルいっぱい食べ物を並べて、それを全部食べるか？不可能でしょう。でも、“食べて、食べて”と言う。私は (その勧める行為は日本人に) 迷惑をかけてると思います。」「(日本人留学生は) もういっぱいなら、いらない、って言っても大丈夫です。普通は言わない。」「(いらないと言えない日本人に対して) 何も (してない)。言にくいな。」

学生1

「(日本人留学生は) 意見の違うところは、顕著に表すことは出来ないと思います。日本人の話し方は、婉曲的。」「例えば、一緒にご飯した時、“この料理はどうですか”いつも答えは、“おいしい”。多分、おいしくないと思います。でもおいしいと言います。お礼にととても注意すること。日本人の特徴と思います。」「出来るだけ自分の本音を言う方がいいと思います。例えば、実はこの料理はおいしくない。でも、おいしいと言うなら嘘をつく(ことになる)。だから、“^{ハイサン}还行=まあまあ”(と答えればいい。」「(日本人留学生がいつも“おいしい”と答えることについてわけを聞かないのかと問われて) 聞きにくい。もし怒ったらどうしようかと (笑。)」

ホストファミリーb

「(留学生は) 行動や習慣が確かに日本人でした。見た感じすごく礼儀をわきまえていて。一目見て日本人だと。なんとさえいはいか分からないけど、人に与える印象が日本人っぽいと思いました。」「(うまく交流できなかったのは) 文化の違いの点だと思います。言葉は主な原因ではないと思います。すべて英語で交流できれば、問題ないと思います。」「交流し始めると、すぐ、彼女はすごく恥ずかしそうで。ただ恥ずかしくて、私たちのように、どうしてもはっきりさせようというのではなくて、彼女はただ恥ずかしくて話さなくなった。そういった状況。」

タイプⅢ-2-B

学生a、学生d、学生e、学生jの4名が該当した。日中の心理的な文化差に対する認識があり、実際の交流場面を通じて葛藤に遭遇している。解決策は様々で、学生aは異なる行為を「習慣」の違いとして許容することで、葛藤を解消させていた。学生dは、文化・習慣の違いとして受け入れながらも、中国の習慣を教えるという解決方法を試みていた。学生eは、最終的に、留学生の行動に執着せず、自分の考え方に基づく判断を優先することで、解決としていた。学生jは、日本人留学生の行動を不可解だと感じつつも、大きく構えて心を寛大に持ち、相手の異質性を許容することで解決を図っていた。

学生a

「(日本人留学生は) ちょっと遠慮気味。例えば、“好きな物、言ってください”(と言うと)、彼ら“何でもいい”とか。ちょっと困ります。(遠慮気味なのは) 日本人の本質? 習慣だと思います。」「日本人は、他の人に迷惑はかけない方がいいと。自分でお金を払う。でも中国人は、私たちとしては、よい友達だからそういう時、遠慮しないでいいです。」「(結局) 割り勘にした。お互いの習慣を尊重しますので、だから、はい、これで決まります。」「留学生のすることは、多くを習慣として、それを聞きました。」

学生d

「(日本人留学生は) 礼儀正しい。うーん、ある場合は、礼儀正しいというより、水臭いと。」「日本人は、いわゆる本音と建前がある。中国人は、日本人よりあんまり多くない。例えば、交流の時はいつも、“ありがとうございました”あるいは“ごめんなさい”あるいは“申し訳ございません”。建前か本音か、よく分からない。」「日本人のそういう言葉、僕、日本語の学生だからちゃんと理解できる。でも一般の中国人は、全然理解できない。」「習慣の違い、ただ、文化の違い。」「日本人が中国へ行って、中国の習慣を出来るだけ学ぶべき。それからその習慣に従って行動すべき。中国はそういうことわざがある。^{ルーシャンシエエシユー}“入郷随俗 (=郷に入れば郷に従え)”。」「そういう現象があって、僕たち日本語の学生が必要となるんだと思います。そういう場合、僕、詳しく説明する。」「仲良かったら、そういう面倒くさい言葉いつも言わない (って教えてあげた)。」

学生e

「私の目から見れば、中国人と日本人の意識の点、考え方が違います。中国では、商品券を政府から国民にあげることもあります。でも、中国人と日本人の態度が違います。日本人の麻生首相の商品券のことについて、不支持率 (が高い)。日本人は、もっと生産に使った方がいいと思う。でも、中国では国民はとても嬉しい。そういう点から、日本人と中国の国民は確かに考え方が違うと。」「日本の留学生と交流してる時、どんなことに興味を持っているか、ちょっと分からない。あんまり表していない。自分の考え方など。例えば、ショッピングに行くとき、日本人の曖昧のせい。意見を聞くと、はっきり言ってくれない。」「“2つの靴どっちが私に似合いますか?” “どっちでもいい” 中国人の場合は、“この色が似合っていない”と、素直に教えてくれます。」「(解決方法は) その時、自分の考え方を言って、話し合う。最後は自分の考え方でします。自分で決めた。」

学生j

「日本人は警戒心、強い。」「初めて日本人に会って、日本人はいつもニコニコしていて“こんにちは”って言っていたんですけども、今度また街で会った時、挨拶をしない場合もあります。目をそらされる感じで。関わりたくない、という感じがします。」「自分が困ることがあったら、もし中国人の友達だったら多分いつも聞かれるんですけど、日本人の場合はあんまり聞かない気がします。助けてくれないかな、って感じです。」

「自分はむこうの文化とか習慣を尊重するだけ。」「むこうも頑張っています。」「むこうも自分なりの表し方もあるんじゃないですか、って思います。表現の仕方が多分違いますけど。」「日本人の友達も、日本人の考え方とか教えてくれます。」「中国人の友達は日本人の友達に何回もごちそうしましたけど、日本人の友達は一回もごちそうしたことがない。」「自分は理解の気持ちで見るとんですけど、自分の中国人の友達は、“あ、日本人はケチだな”と思ってるんじゃないですか。」「(解決策を聞かれて) 理解

の気持ちで取り扱います。器は大きいです（笑）。」

タイプⅢ-2-C

このタイプは、文化の違いを認識しており、そこから葛藤が起こりうることも想定している。ただし、実際に異文化間のトラブルは体験したことがない。学生i、学生n、ホストファミリーcが該当した。

学生i

「日本語を勉強してから、色んな違いがあることに気づいています。」「食事の時は、日本人はよくいただきますと言って、中国人はそんな礼儀はほとんどないと思います。」「日本人はとても真面目な性格を持っていると思います。学術的な問題は、とても細かい問題、物、が含まれています。小説の中を見れば、日本人の小説家の感情はとても細かいと思います。」「(トラブルは) 文化的、習慣的な違い(が原因になりうる) と思います。いつも私たちは、生まれてから、あることをこう感じます。でも、外国人にとっては、全然違う感じになります。」「(実際に異文化間の) トラブルに遭ったことはない。」「私が日本に行ったら、日本人の生活に溶け込まなければならないと思います。日本人の留学生は中国に来てから、私たちが中国人として、中国人の方法で、方式で、優しく付き合いたいと思います。」

学生n

「(中国は) 北と南も、文化が違います。北の人はちょっと朗らかで、話も大声で話したり。」「日本人は、勘がいい。例えば、暑い時、暑いなあと言わない。“ちょっと、窓を開けてもいいですか?” ああ、その人が暑いと分かる。」「日本人はいつも礼儀が正しい。いつもマナーに注意する。ちょっと接触してからすぐ分かった。」「中国には、手帳があまりない。(日本人) はいつも、細かいことを記してる。金曜日は何をしている、土曜日は何をしますか。でも、中国人は、全然ない。中国人のデメリットとも言える。準備しないから。」「南と北の人も衝突ある。同じ国でも、文化が違うから衝突がある。」「解決はちょっと複雑。2人の考え方が違う。その解決法もそんなに簡単じゃないと思う。」「(実際の日本人との付き合いで困ったことは) なかった。」

ホストファミリーc

「(実際の日本人留学生との交流で) 困難なところは特にこれとってなかったように思います。」「(文化や習慣の違いが原因で交流が難しくなることがあると思うか聞かれて) それは避けられないと思います。ただ、誠意を持ってその人を理解する、出来るだけ彼らが望むところを満足させてあげれば、交流はそれ程難しくはないと思います。」「(交流の難しさは) 多分、大部分はやはり習慣の違いからくるもの。でも、交流のプロセスで決定的な働きをするのは、やはり態度だと思います。この習慣の違い

いというものは、その人がどのような習慣を持っているか分かっているなら、時にはその人の習慣に従って、時にはその人に中国の習慣はこうですよ、と教える必要がある。」

考察

中国人ホストの対応には、奥西・田中（2009）にみられる日本人ホストの対応とは、異なる点がいくつか見いだされた。

第1点目は、以下の通りである。日本人学生の場合、異文化に対する気づきは全員が持っており、A段階でタイプⅢに集約されていたのに対し、今回はそもそも異文化性の認識を持っていない者がみられた。合計21名のうち、ホスト学生1名（学生c）、ホストファミリー1名（ホストファミリーf）が該当する。ホストファミリーfの場合は、そもそも異文化の存在すら意識していなかった。学生cの場合は、日本人留学生とは同じ文化圏に属していると認識しており、そのため日中の間であれば文化間の差はないという認識であった。

但し、奥西・田中（2009）による日本人ホスト学生の調査では、多文化環境下にある日本人学生を対象としており、今回のように「日本人留学生」という特定の文化出身者との交流を中心に実践している者を対象とした調査とは異なる。そしてどちらの調査も少数の事例のみ取り扱っていることから、この違いは興味深いものの、日中のホストの異文化性認知の差としてのみ解釈することは早計といえる。

第2点目は、従来から異文化交流の正統派であると考えられてきた、Ⅲ-2-Bタイプに属する者は、日本と中国双方の学生にみられたものの、異文化性への対処方略には異なった傾向がみられたことである。日本人学生には、相対化、歩み寄り、意見の調整など相手の存在を意識した双方向的な調整がみられた。しかし、今回の中国人ホストにおける異文化葛藤の対処方略は、相手への歩み寄りや相手の視点を考慮する傾向は比較的少なく、いわば自己を基軸とした対処方法が見られた。異質な行動を単なる「習慣の違い」として丸ごと受け入れて許容したり、留学生の行動には執着せず、結局自分のやり方で物事を決めたり、自己の視点を最優先した対処方法をとることが顕著であった。そして寛容や受容によって、葛藤を問題視しないように受け止めていた。いわば自分から主体的に組み立てた寛容志向の対応ともいえる。こうした認知的対処方略の使用が、彼らに異質さへの高い耐性を可能にしているものと推測される。今回は少数例の知見のため、これが普遍的なものかどうかは検証が必要だが、この対処方法の違いは興味深い。

第3点目は、中国人学生、ホストファミリーの各タイプに横断的な特徴として、対人交流における情熱や積極的姿勢、誠実な態度等が強調される傾向が強かったことが挙げられる。これは、中国人が対人接触を行うときに、認知面で示す文化的特徴なのかもしれない。この対人交流に対する熱意は、今回の対人関係形成の推進力となっている。あるいは交流の相手が中国人であろうと、今回のように外国人である日本人であろうと、こうした態度が変わりなく発揮されているのかもしれない。日本人に

とって、外国人との交流が、しばしば「国際交流」という特別な意味づけの下で行われるのに対し、今回の中国人ホストからは、「国際交流」という特別な意識は見取れなかった。接触の対象となる外国人が日本人だったことによるのか、対象に依らない特徴なのかは、今後、交流の対象をより広げたケースでの検討を通じて、明らかにしていけるだろう。

今回のサンプルは、この交流以前には外国人とほとんど接触体験がないか、あっても浅い接触にとどまっている者であり、特に深い交流をしたことがある者はいなかった。異文化葛藤の可能性を予想できる者が少なかったことや、実際の交流を通して葛藤場面に遭遇しなかった者が多かったことは、こうした交流の浅さに起因する面もあるかもしれない。熱意と誠実さを持って対人関係の推進力とする、今回見いだされたような交流スタイルを仮に中国式と呼ぶとして、それは異文化接触がより深く多様になれば変化するのだろうか、更なる研究が待たれる。

日本人の文化的行動やコミュニケーションスタイルが、中国人のそれらとかなり異なったものであることは複数の文献で指摘される場所であるが（たとえば、園田，2001；西田，2007；周，2007）、それらの違いが、どのようなゲストへの対応の違いを生み出し、その社会における外国人との多文化共生上の課題をもたらすのかについて、研究は端緒に着いたばかりである。今回のサンプルにおける対応は、様々な要素が複雑に絡み合った結果として生じている。この事象を解明するには、今後、ホスト側及びゲスト側の要素を分離していく、より精緻な研究展開が望まれる。

引用文献

- Furnham, A. & Alibhai, N. (1985). The friendship networks of foreign students : A replication and extension of the functional model. *International Journal of Psychology*, 20, 709-722.
- Furnham, A. & Bochner, S. (1982). Social difficulty in a foreign culture : An empirical analysis of culture shock. In S. Bochner (Ed.), *Cultures in contact : Studies in cross-cultural interaction*. Oxford : Pergamon Press.
- Hall, E.T. (1976). *Beyond culture*. NY : Anchor Press.
- Hofstede, G. (1991). *Cultures and organizations : Software of the mind*. London : McGraw-Hill International.
- 文部科学省 (2008). 「留学生30万人計画」骨子の策定について 文部科学省 2010年6月30日
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/attach/1249711.htm
- 日本学生支援機構 (2008). 平成20年度外国人留学生在籍状況調査結果 日本学生支援機構 2010年6月30日
http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data08.html
- 西田ひろ子 (2007). 米国、中国進出日系企業における異文化間コミュニケーション摩擦 風間書房

- 奥西有理・田中共子 (2008). 日本人ホスト学生による文化的サポート：留学生の異文化適応に関する支援的役割の検討 多文化関係学 5, 1-16.
- 奥西有理・田中共子 (2009). 多文化環境下における日本人大学生の異文化接触における対応：AUC-GS学習モデルに基づく類型の探索 多文化関係学 6, 53-68.
- 周宝玲 (2007). 日経企業が中国で成功する為に一異文化経営が直面する課題— 晃洋書房
- 園田茂人 (2001). 中国人の心理と行動 NHKブックス
- 田中共子・中島美奈子 (2006). ソーシャルスキル学習を取り入れた異文化間教育の試み 異文化間教育 24, 92-102.

謝辞

調査にご協力いただいた中国S大学の宋徳強先生に心から感謝申し上げます。

丁寧な翻訳をしてくださった大阪大学言語文化研究科博士後期課程の田鴻儒氏に感謝申し上げます。

表1. AUC-GS学習モデルを用いた中国人学生・ホストファミリーのタイプ分け

A段階 異文化存在 気づき	U段階 異文化葛藤 理解	C段階 異文化葛藤 対処	想定 タイプ	中国人学生 分類	中国人ホストファミリー 分類
I. なし	1. なし	A. なし	I -1-A	-	
		B. あり	I -1-B	-	
		C. 想定なし	I -1-C	学生c	ホストファミリーf
	2. あり	A. なし	(I -2-A)	-	
		B. あり	(I -2-B)	-	
		C. 想定なし	(I -2-C)	-	
II. あり Culture 1 (Hofstead, 1991)	1. なし	A. なし	II -1-A	-	
		B. あり	II -1-B	-	
		C. 想定なし	II -1-C	-	
	2. あり	A. なし	(II -2-A)	-	
		B. あり	(II -2-B)	-	
		C. 想定なし	(II -2-C)	-	
III. あり Culture 2 (Hofstead, 1991)	1. なし	A. なし	III -1-A	-	
		B. あり	III -1-B		ホストファミリーe
		C. 想定なし	III -1-C	学生f, 学生h, 学生k, 学生m, 学生o	ホストファミリーa, ホストファミリーd
	2. あり	A. なし	III -2-A	学生b, 学生g, 学生l	ホストファミリーb
		B. あり	III -2-B	学生a, 学生d, 学生e, 学生j	
		C. 想定なし	III -2-C	学生i, 学生n	ホストファミリーc

() は理論的には想定し難いカテゴリであることを示す